もくじ

はしがき……鰺坂二夫… 2
学習社会を支える父親像の研究グループについて……林部一二… 3

I　戦後における父権の低下……6
(1)　労働形態の変化……6
(2)　家族構造の変化……11
(3)　戦後における価値観の変化と父権……17
(4)　子どもからみた現代の父親……21

II　父親の役割に関する理論……27
(1)　家計維持者としての父親……28
(2)　フロイトの父親論……31
(3)　パーソンズの父親論……34

III　子どもの発達と父親……40
(1)　性役割発達と父親……41
(2)　道徳性の発達と父親……45
(3)　知的発達と父親……48

IV　新たな父親像の創造……50
(1)　制度的権威から人格的権威……50
(2)　母親との協力関係の確立……51
(3)　広い社会を伝達する者としての父親……52
(4)　母子関係の切断と父親としての成長……53

〈参考文献〉……56

I　戦後における父権の低下

千石保・飯長喜一郎著の『日本の小学生』のなかに，朝父親を送り出す時に，小さい子が，「パパ，また来てね」と言ったという笑い話のような話が紹介されている。たまに早く帰った時にしか顔を合わさない父親は，子どもにとってお客様のような存在なのである。

父親なき社会と現代の病理

ミッチャーリッヒが，『父親なき社会』という著書をあらわし，父親像を消失した現代社会の病理現象を描き出したのは，すでに20年も前のことである。その間に，学生の反乱や青少年非行，登校拒否，家庭内暴力などの青少年問題の一因が父親の教育力の低下にあるという指摘がくり返しなされてきた。次の一文は，精神科医であり，『甘えの構造』の著者としても有名な土居健郎の文章である。

弱い父親
（土居健郎著『甘えの構造』より）

「今日の世代間の問題はもともと古い世代の自信欠乏に発していると考えられる節がある。このことは家庭のレベルでいえば，父親の影がうすいこと，したがってほとんど父親不在といってよい状態が今日ふつうになっていることに現れている。戦後，一般の注意をひくようになった少年問題として学校恐怖症ないし登校拒否といわれる現象があるが，このような少年の家庭を調べると一様に父親が弱い人物であったということである。この所見はしかし単に登校拒否児童の家庭に限られるものではなく，今日の社会全体に共通した特徴なのであろう。」

「父親不在」という言葉はかつては父親欠損の家庭を意味したが，いまでは父性の消失や父権の失墜を意味するようになり，社会全般における父性原理の弱さが現代社会特有の病理として人々の関心を呼ぶようになった。このような父親の権威の低下は，いったいいかなる原因によって生じたのだろうか。

(1)　労働形態の変化

労働の分業化と父権の低下

ミッチャーリッヒは，父親の権威の空虚化と父親の家庭内

および家庭外の威信の失墜を促したのは，機械による大量生産と複雑化した集団管理に結びついた分業の発達，住居と労働場所との分離，自立生産者から消費的な賃金労働者の立場への変化であると述べている。昔のように子どもが父親のあとを継ぎ農業や漁業に従事していた時代には，父親は子どもに仕事の技術や労働の大切さを身をもって教えることができた。そこでの労働教育は主として体験学習であったから，いちいち口で説明する必要もなかった。しかし，現代では，父親は家庭から離れた場所で，しかも，高度に組織化され分業化された生産システムのなかの一部門の労働に従事している。父親の働く姿を直接見たことのない子どもに，父親は，自分がどのような仕事にたずさわっているかを説明しなければならないが，このような状況ではその説明はどうしても具体性を欠いたものになってしまう。

父親の仕事は子どもにどの程度理解されているか

いったい，いまの子どもたちは父親の仕事のことをどの程度知っているのだろうか。表①は中学生に対して，父親の仕事の内容を知っているかどうかをたずねたものであるが，「非常によく知っている」，「かなり知っている」と答えた者は全体の約3分の2であり，残りの3分の1はあまり知らないと答えている。これを職業別にみると，とくに公務員や会社員などの組織社会で働く父親を持つ子どもは，知らないと答えた者の割合が高い。表②あるいは表③をみれば，これは当然の結果と言えるだろう。公務員や会社員の父親を持つ子どもは父親の働く姿を見たことがなく，また，父親から仕事の話をきかされるということが少ないのである。たとえ仕事の話をしたとしても，仕事の楽しさや成功のことを話題にすることが少ないということも，父親の仕事に対する子どもの関心を低下させることにつながっているものと思われる。

仕事の意義を理解させることのむつかしさ

日本人の職業構成のなかで，いわゆる組織で働くサラリーマン層はそのうちのかなりの部分を占めている。次の調査の結果と考え合わせると，父親の働く姿を見たことのない子どもや父親から仕事の話を聞く機会にめぐまれない子どもは日本全体でみればかなりの数にのぼるのではないだろうか。

名越清家『家庭環境と発達』より

表① 仕事の内容についての認知度

職業＼認知度	非常によく知っている	かなり知っている	少し知っている	まったく知らない
農業・漁業	16.7%(7 人)	52.4%(22人)	28.6%(12人)	2.4%(1 人)
自営業	34.1 (136)	49.9 (199)	15.3 (61)	0.8 (3)
会社員	10.6 (74)	42.6 (298)	45.4 (318)	1.4 (10)
公務員	12.0 (25)	39.4 (82)	46.2 (96)	2.4 (5)
専門職	24.6 (17)	44.9 (31)	30.4 (21)	0.0 (0)
教員	20.6 (11)	58.2 (32)	21.8 (12)	0.0 (0)
その他	9.5 (16)	48.2 (81)	39.3 (66)	3.0 (5)
全体	17.4 (286)	45.4 (745)	35.7 (586)	1.5 (24)

＊名越清家の調査（昭和52年度・文部省科学研究費による）結果より。

表② 自分の仕事についての話

職業＼選択肢	よくしてくれる	たまにしてくれる	ほとんどしてくれない	無回答
農業・漁業	14.3%	52.4%	33.3%	0%
自営業	18.3	52.8	28.8	0.3
会社員	13.1	51.5	35.1	0.3
公務員	17.3	50.5	32.2	0
専門職	20.3	50.7	29.0	0
教員	25.5	43.6	30.9	0
その他	14.2	49.7	35.5	0.6
全体	15.8	51.2	32.8	0.2

表③ 仕事に関する話題

職業＼選択肢	仕事の楽しさや成功	仕事のぐち	仲間のうわさ話など	ほとんど話さない	その他
農業・漁業	30.0%	20.0%	10.0%	40.0%	0%
自営業	36.5	12.4	3.5	34.9	12.7
会社員	31.5	8.9	11.8	39.0	8.8
公務員	28.8	7.2	10.1	41.8	12.0
専門職	42.0	13.0	7.2	27.5	10.1
教員	29.6	7.4	14.8	27.8	20.4
その他	31.3	15.1	6.6	36.1	10.8
全体	32.7	10.6	8.9	37.2	10.6

＊表①，②，③は，名越清家の調査（昭和52年度・文部省科学研究費による）結果より。

表①～③は，梅本堯夫・麻生誠編著『教育学講座3，発達と環境』所収，名越清家「家庭環境と発達」より引用。185頁。

現代は多くの職業分野で分業化がすすみ，父親が自分の仕事の内容をいきいきと子どもに語ってきかせることはむずかしくなっている。子どもにとっても父親の仕事の意義や目的を理解することは困難になっているから，労働そのものを収

入や地位，労働時間といったものを手がかりとして理解する子どもがふえてくる。このような量的な尺度で労働をみるから子どもの勤労観はふくらみが乏しくなり，それとともに父親に対する見方もうすっぺらいものになっていくのである。

職住分離による父と子の接触の減少

このような労働の質そのものの変化とともに，職場と家庭が分離してしまったことも父親の教育力を低下させた1つの要因であろう。

いま都市部では通勤に1時間以上要する父親はさしてめずらしくはない。残業などが多い時には，何日も子どもと顔を合わせないこともある。つぎに引用した作文はそのような父親をもつ小学校4年生の女の子の書いたものである。

「お父さんは，銀座の会社に行っています。そのせいか，いつも真夜中の12時ごろ帰ってきます。早い日で9時30分ごろです。土曜日は休みで，この日は9時ごろまでねています。私は，お父さんはたいへんだなあと思います。もう少し早く帰ってくれば，よくねむることができるし，私たちと話もできるのに。休みになると，いっしょにお兄ちゃんとお父さんと私でトランプやオセロゲームができます。だから早く帰ってきてほしいです。」

（千石・飯長著『日本の小学生』より）

昭和55年に日本教材文化研究財団が出した『育児としつけに関する意識調査』をみても，15歳までの子どもの約3分の1が父親と一緒に食事をしないことが多いと答えている。父親との接触の機会が少ない子どもにとって，父親とは家で寝とまりするだけの存在としてしかうつらないのは当然だろう。

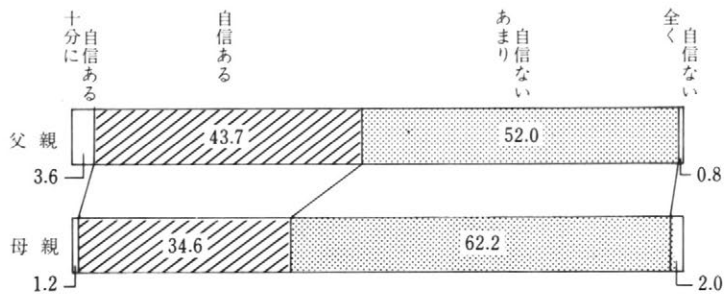
子育ての自信度と父子接触

ところで子どもとゆっくり接する時間が少なくなった父親たちは，そのことをどのようにみているのだろうか。図④は子育ての自信度について聞いた結果であり，さらに図⑤は，子育てに自信がないと答えた親にその理由をたずねた結果である。自信がないと答えたものは，父親では52.8%，母親では64.2%にものぼっている。その理由のなかで目をひくのは，父親の場合，母親に比べ，「遊び相手になってやれない」とか「勉強をみてやれない」，「めんどうをみてやれない」といっ

た，日頃の接触量の少なさを理由にあげる者が多いことである。図⑥は，子どもとの会話の程度と親としての自信度との関連をみたものであるが(母親も含んでいる)，明らかに，子どもとの会話の少ない親ほど自信度が低くなっている。

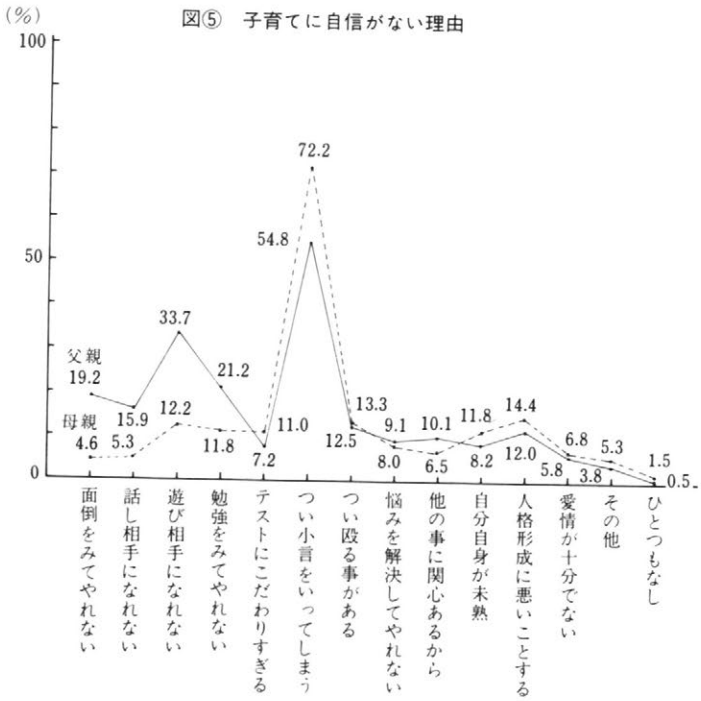
〔図④～⑦の資料出所〕『Growing Together—すばらしい親子関係のために—報告書』電通リサーチ（昭和57年）より

図④　子育てに対する自信度(父・母別)

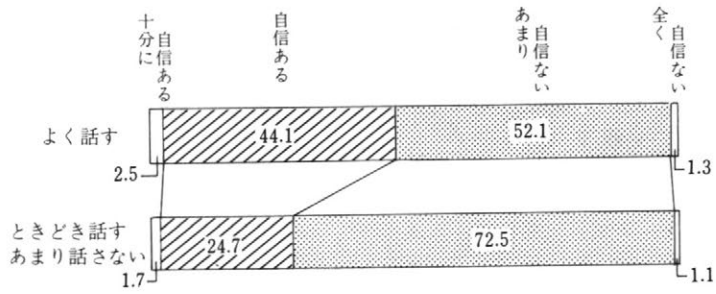


図④～⑦は『Growing Together——すばらしい親子関係のために——，調査報告書』電通リサーチ，(昭和57年)より作成。

図⑤　子育てに自信がない理由



図⑥　子育てに対する自信度(会話の頻度別)



成長のモデルとしての父親

子どもにとって親は成長のモデルである。日常的な接触のなかで親の身ぶりや動作から，ものの考え方や情操にいたるまでのさまざまなことがらを，子どもは親をモデルとしながら身につけていくわけである。成長期のそのような時期に，父親が身近にいないということは，海図なしに見知らぬ海を航海しているのと同じなのである。

(2)　家族構造の変化

労働の質の変化や職住分離は，家族外の社会的な影響と言えようが，父親の権威の失墜は，家族構造そのものの変化によるところも大である。

世帯人員の減少

家族の平均世帯人員は，昭和25年には5.0人であったが，昭和40年には4.0人となり，さらに昭和50年には3.4人にまで減少した。家族規模の縮小は，一面では，家族の親密度や凝集性を高めたが，父親の権威はそれと反比例して低下していった。権威が成立するためには父と子の間に一定の距離が必要なのであるが，小家族になると父親は子どもにとって身近な存在となるために，以前のような威厳を保つことはむずかしくなってくる。

さて，父親と子どもとの関係は一方では職住分離によってその接触の少なさが指摘され，また他方では，上で述べたような小家族化による父と子の間の心理的距離の縮小が指摘されている。そして，このたがいに矛盾する現象が，いずれも父親の教育力の低下や権威の失墜と結びつけられて論じられ

ている。このことを理解するためには，戦前から戦後にかけての家族構造の変化をさらに掘り下げて，その本質的な部分を明らかにしなければなるまい。

ベネディクトの描いた戦前の父親像

文化人類学者であるルース・ベネディクトは『菊と刀』の中で，日本の父親と子どもとの関係を次のように描いている。

「父親に対しては子供はひたすら恭順の態度を示す。父親は子供にとっては，高い階層的地位を代表するりっぱな模範であって，しょっちゅう用いられる日本語の表現を借りて言えば，子供は『しつけ』として，父親にふさわしい敬意を表現するすべを学ばなければならない。父親は西欧のほとんどの国の父親よりも，子どもの訓育に口出しすることが少ない。子供の訓育は女の手にゆだねられている。父親は自分の意志を幼児に伝えたい時には，たいていただ黙って睨みつけるか，あるいは簡単な訓戒を与えるかするだけである。そして，そんなことはめったにしないことなので，子供は即座に父親の言うことを聞く。」（ルース・ベネディクト著『菊と刀』より）

「イエ制度」の中の父親

ベネディクトが『菊と刀』を著す際に，その素材として用いたのは，第2次大戦中の日本人収容所でのインタヴュー結果であった。そのインタヴューの対象となった人が持っていた父親像は，日本的な「イエ制度」の中での父親像であると言ってよかろう。戦前の父親が持っていた権威は，このイエ制度を抜きにしては語れない。

父権を支えていた戸主権・夫権・親権

旧民法では，戸主権・夫権・親権が明確に規定され，それらが父親の権威を法的に支えていた。その基本とされている家族形態は，絶対的な権限を持った家長の指揮のもとに，他の家族員が従属するという家父長制家族であった。このようなイエ制度のもとでは，イエを離れた個人は主体性を持ち得ず，個人は家長を通してのみ社会と関係を持つとされていたのである。家長は，まさにイエの代表者であり，顔であった。

家父長制のもとで，家長はさまざまな特権的な待遇を享受していた。たとえば，日常的な些細な事でも，家長は，自らそれを行うことはせず，妻や子にさせるのが普通であったし，

求められた家長としてのふさわしい行動

家長のために，家族とは別の食事が用意されるということも珍しくなかった。しかし，一方で，いろいろと家長としてのふさわしい行動や振る舞い方が決められており，それから逸脱すると家長の権威を汚すものだという非難を受けた。たとえば，子どもにやさしく話しかけたり，一緒に遊んだりするよりも，しかめっ面をして，にらみを利かしている方が，父親らしいと思われていたわけである。子どもは，父親に対して「恭順」の態度を示すものとされていたが，このような態度は，ベネディクトも述べているように，幼児期から母親によってしっかりとしつけられたのである。

しつけられた「恭順」の態度

父権を支えた母親の存在

家父長制のもとでは，父親も子どももそれぞれ「父親らしく」また「子どもらしく」振る舞うよう自ら努力するとともに，周りからもそれが期待されていたわけであるが，父と子の間にあって，父親の権威を高める重要な働きをしていた母親の存在を見逃すことはできない。イエ制度のもとにおいては，女性には何らの法的，社会的権限が与えられていなかったが，日本の女性はそれなりに生きるすべを身につけていた。日本の家庭生活を詳しく調査したE.ヴォーゲルは，日本の妻が「自分の希望を直接述べるかわりに，巧妙な策略を弄することによって，その望みを達する技術」にすぐれている点を指摘しているが，夫を高い地位に置き，それを巧みに操縦しながら，その権限を利用して家庭を円満におさめていくというやり方は，日本の妻に共通したものと言うことができよう。ヴォーゲルが，このような夫操縦術は，「優勢な夫の地位をくつがえすことをせず，夫と妻の力を平等にさせてゆく」日本的な男女平等化の1つの方法であると述べていることを付け加えておこう。(巻末，参考文献(9)参照)

父権の権威を利用し，しつけを効果的に行った母親

当然，このような方法は子どものしつけにもあらわれる。母親は，子どもに対する自らの発言力を高め，しつけを効果的に行う為に，父親の権威を大いに利用したのである。それは，子どもに父親は偉い存在，こわい存在であるということを認識させるという方法であった。父親が実際にどれだけ偉い人物であるかはその際問題ではなく，肝心なのは，子ども

子どもがいだく父親イメージの重要性

がどのような父親イメージをいだくかということである。その意味では，母親が子どもに対してどのような「父親像教育」を行うかということが，父親だけでなく母親自身の権威をも大きく左右したと言ってよいだろう。

明治以来，日本に来た外国人が一様に述べているのは，日本の家庭が母子中心で父子の接触が少ないにもかかわらず，西欧に比べ父親に対する子どもの尊敬の念が強いということであるが，外国人の眼には，「東洋の神秘」とうつる日本人の父子関係も，その背後にいる母親の果たしていた役割を理解すれば，何ら不思議なことではない。

祖先崇拝と父権

さて，父親の権威を成り立たせていたものとして，イエ制度や母親の役割について述べてきたが，最後に，父権の源泉とも言うべき家督と先祖観念の問題を取り上げておかねばなるまい。イエ制度やその中での女性の地位の問題も，その根底をさぐれば，家督や先祖観の問題にたどりつくと言っても言いすぎではない。

家長の権限を左右した家督

かつて，親から子へと仕事が世襲されていた時代には，家督のゆずり渡しは大変重要な意味を持っていた。家督を相続するということは，土地や財産を受け継ぐというだけでなく，家長が保有していた権限をすべて引き継ぐということを意味していた。家督はそれを有する者の権力を象徴するものであったが，それゆえに，家督の大小が家長の権限に密接に関係していた。ところで，家督と言えばすぐに土地や家屋を思いうかべるが，物質的財産以外の家督も存在する。次に引用するのは，柳田国男がこのような家督について述べた部分である。

柳田国男の家督についての考え方

「中世の名称で諸道とも職人とも謂ったもの，即ち耕作以外の勤労によって，交換を以て衣食の料を得て居た人々には，術芸もしくは業務そのものに対する態度，之を社会に役立たせる方式等に，家督の中心を置くものが多く，従って口伝家伝といふ特殊の教育法があった。つまりは是が土地のやうな眼に見える財産の代わりを為したので，元手即ち資本といふものにさう大きな力をもたせなかった頃の商

売なども，同じ系列に算へられて居たのである。それよりも重要であったのは役人といふ階級，是も農民の目からは，田を作らずに暮し得る人々として，諸道の中の最も高いものといふ風に見えたかもしれぬ。ともかくも是に世襲の慣例が伴なふ限り，其地位は亦一つの立派な家督であった。…さうして，それには確かに単なる伝授以外に，之を受け継ぎ来った代々の意思ともいふべきものが添い，又それに対する子孫の理解ともいふべきものが伴なって居た。家門は此意味に於て，年代を超越した縦の結合体であった。」

（巻末，参考文献(10)参照）

先祖の意思の実行としての家督相続

このように，家督には土地などの他に，ある種の技能や技術，世間的信用，地位などが総体として含まれており，それを世襲するということは，イエに付随する伝統をそっくり譲り受けるということを意味していた。この点が非常に重要なことであろうと思う。家督を譲り受けた個人は，財産及び家族に対してあらゆる権限を有することになるが，彼はこれを勝手に処分することはできないのである。それは先祖代々受け継がれてきたものであり，家督を守りそれを次の世代に譲っていくことは先祖の意思を実行することを意味していた。

フォーテスによる祖先崇拝の理論

ところで家督を相続した家長には，先祖を祀るという義務が課せられたが，実は，この祖先崇拝が父権の問題と深く結びついていたのである。人類学者であるM.フォーテスが，アフリカの未開部族タレンシ族を調査し，祖先崇拝が現実の父子関係にどのような影響を及ぼしているかを明らかにしているので，その内容をかいつまんで紹介してみよう。

タレンシ族では，父の死後初めてその息子に家督の相続が行われる。しかし父の生存中でも息子が成長してくると，当然父親と息子との間に家督の占有をめぐる緊張関係が生じてくる。それが大きな問題へと発展しないようにするためには，父親の地位を共有するような感じを与える行為や関係から，できるだけ息子を遠ざけておく必要がある。実際，タレンシの息子はたとえ肉体的に成長しても，父親と同等であるかのように振る舞ってはならず，法的にも宗教的にも独立の人格を持つ存在として認められていない。しかし，家族の和が保

たれる為には，息子に課せられたこのようなタブーが，強制としてではなく，道徳的な意味合いを含んだものとして実行されなければならない。フォーテスは，それを可能にするのは，pietasという感情であると述べている。

pietasの重要性

それでは，pietasとはいったい何か，そしてそれはどのようにして形成されるのか。フォーテスによれば，「pietasは子どもに対し，親への服従と尊敬を要求し，親の訓育の前に自己の意志や欲望を押え，経済的に奉仕し，法的未成人の身分に甘んずることを要求する。こうした規則を守ることによって得られる具体的報酬は，両親や他の親族の満足であり，世間一般の是認である」と述べるとともに，「生きている親に対するpietasは即ち祖先に対するpietasであり，したがって祖先の慈悲につながると考えられているから，道徳的報酬も得られることになる」と述べている。すなわち，pietasとは，孝行を生み出すような子の親に対する肉身の情のことであり，それは祖先に対する崇拝から生じるのである。父親を敬うことは祖先を敬うことを意味し，逆に，祖先に対する敬意が親の権威を基礎づけているのである。

父性を永久化したものとしての祖先

このように父親に対するpietasと祖先に対するpietasが1つのものとみなされる為には，父親と祖先がある連続性を持つものとして認識されていなければならないが，この点についてフォーテスは，タレンシ族では祖先とは，現実の父親の死にもかかわらず，「父性」を永久化したものと受けとめられていることを指摘している。肉体を持った父親は死ぬが，「父性」そのものは消滅せず次の世代へ受けつがれる。そして，また，死んだ父の「父性」は祖先として不滅化され絶対化されて，生きている子孫に影響を与えつづけるのである。このように，父親と祖先とは，「父性」によって連続的なものとしてつながっているのである。それでは，父親を通して子どもに働きかける祖先とはいったい何なのだろうか。フォーテスは，次のように祖先の本質を明解に述べている。

厳しい審判者としての祖先

「祖先崇拝に関して非常に特徴的なことの1つは，祖先が恵み深い神としてではなく，生殺与奪の力を持つ権威者，

前にも述べたような審判者として想像されていることである。このようなイメージは，子どもの将来を思って世話を焼き，養育し，生活の糧を稼ぐために一生を費す，優しく，愛情に満ちた親としての男ないし女の全体像では決してない。祖先崇拝の中に取りこまれた性質は，親のもう1つの面，すなわち子ども達が慣習に合うように，また社会の中でしかるべき位置を占められるように社会化の義務を果たす際，どうしても必要な厳しいしつけを行う者，子ども達の欲求不満の源としての親の一面である。」

（巻末，参考文献(11)参照）

祖先にかわりうる新たな審判者は再建できたか

柳田国男の『先祖の話』とフォーテスの『祖先崇拝の論理』を読み比べると，日本にもかつてはタレンシ族が持っているような先祖観があったのではないかと思う。近代化の過程で祖先崇拝は急速に廃れていったが，それにかわり得るものを我々は確立していると言えるであろうか。

以上，家族構造に焦点をあて，かつて父権を支えていた幾つかの要因について説明を加えてきたが，それらのいずれもが，戦後の社会変化の中で消失していった。

(3)　戦後における価値観の変化と父権

これまで父権低下の原因を，労働形態や家族構造の変化に求めて説明を重ねてきたが，これらの要因と並行して進行してきた価値観の変化について続いて述べていくことにしよう。

青年の流動志向

まず第1に，価値観の変化の中で，父権と特に関連が深いと思われるのは，現代青年の流動志向の問題である。家督のもつ意味が戦後大きく変わってきたことは周知のとおりであるが，いまや青年にとって家督は有り難いものと言うよりは，むしろやっかいなものとして受けとめられている。代々受け継がれてきた家や土地を相続することによって自分の生き方を限定されるよりも，自由に移動でき，広い範囲で職業や結婚相手を選べるという方が，彼らにとっては魅力的なのである。家督を背景にして維持されていた父親の権威も，このような流動志向が大勢を占める中で必然的に弱くならざるを得ない運命にあると言えよう。

学歴意識の問題

第2に，学歴意識の問題が挙げられる。戦後，高学歴化がすすみ，親よりも子の方が1ランクあるいは2ランク学歴が高いという現実がどの家庭でもみられる。一般に，最上位と最下位の間のランクの数が多い程，人々の序列意識は烈しくなると言われているが，大半の者が初等学歴しか持たなかった戦前の社会よりも，多くの者が高校や大学へ進学するようになった戦後社会の方が，学歴意識が強まるのは必然の結果と言えよう。問題は，学歴に関する序列意識が微妙に親子関係に影響を与えている点である。学歴意識に関するエピソードとして，最近次のような話を聞いた。

学歴意識に関するエピソード

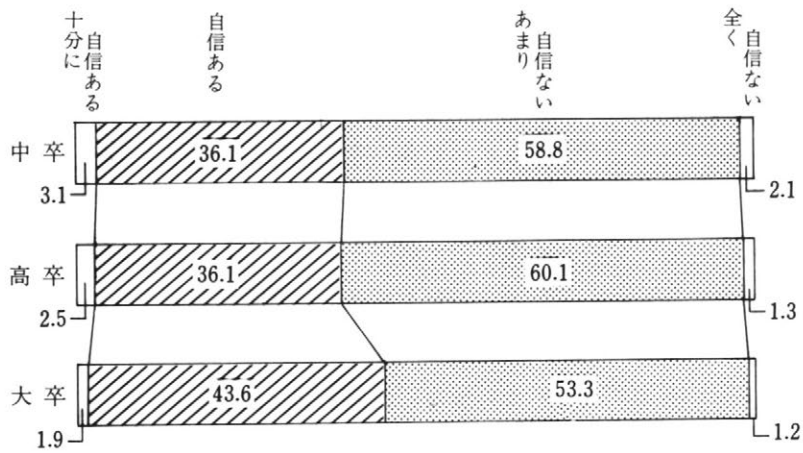
成績も良く，性格も素直なある女子大生が，食事中にあわててごはんをこぼしてしまった。それを見て，一緒に食事をしていた父親と母親が,「大学生にもなってなんということを…」と言ってきつくしかったそうである。その時彼女は，しかられたくやしさのためか，心の中で「自分達は小学校しか出ていないくせに」と思ったというのである。

彼女は，自分の歪んだ学歴意識に対する反省としてこのことを述懐したのであるが，同じような意識が現代青少年の心の奥に多かれ少なかれ巣くっているのではないかと思う。それを単なる杞憂にすぎないと笑って過ごせないような情況が現代社会では進行しているのではないだろうか。

子育ての自信度

学歴と親子関係の問題をもう少し別の角度からみてみよう。図⑦は，子育ての自信度を父親の学歴別にみたものであるが

図⑦　子育てに対する自信度(父親—学歴別)



自信喪失の傾向は大卒と高卒以下とで明らかにひとつの断層がみられる。また，母親については，図に示していないが，父親以上にこの傾向は強い。

子どもに対する親の圧力

この調査では，図⑤（10頁に示した）の親として自信がない理由についても学歴別に分析しているが，その結果を父親の学歴別にみると，低い学歴の父親ほど，「勉強をみてやれない」とか「テストの点数にこだわりすぎる」といった理由や，「自分自身が未熟だから」といった理由を挙げるものが多いという傾向がみられる。

現代社会では，学校での成功・不成功が子どもの幸福を大きく左右すると言われているが，その意味では成功へと導き得るようなしつけや教育を行い得るかどうかが，親としての自信にも少なからぬ影響を与えることになる。

しかし，教育に対する親の関心が強すぎる場合には，かえってそれが子どもの幸福をそこなうということもある。なにがなんでも上の学校へという態度を親が取る場合，子どもはそれを重荷と感じ，親の期待が逆に子どもの精神発達に悪い影響を及ぼすことが考えられる。このことに関しておもしろい実験があるので，1つ紹介しておこう。

パーリンらが行ったカンニングに関する実験

パーリンらが行ったカンニングに関する実験では，父母のいる前で6つの問題を解くように求められた子どもが，どの程度カンニングするかが観察された。その結果，父母が上手に問題を解くように圧力をかければかけるほど，その子どもは多くカンニングを行う傾向がみられた。親にも面接したパーリンらは，子どもに対し圧力をかける傾向と家庭の経済状態からかけ離れた学歴を子どもに求める傾向との間に深い関連が認められたと報告している。この実験結果について，パーリンは次のように述べている。「要するに親の要求水準が高く，しかも自分では目標達成の為の手段を持ち合わせていない時に，子どもへの圧力が生まれるといえそうである。この干渉の結果は，カンニングをすすめることになり，親の願いとはまったく別の効果をもたらすことになった。」

（巻末，参考文献(3)参照）

やみくもに子どもに勉強を押しつけたり，ただ高校へ行け

学歴至上主義は親の権威を低下させる

ばよい，大学へ行けばよいといった勉強至上主義や学歴至上主義的な態度をとるのではなく，子どもが将来どのように生きていくべきなのか，そして，今勉強することがそのこととどう結びついていくのかを，子どもの立場に立ってゆとりをもって冷静に考え話し合うという態度が親に求められていると言えそうである。親が学歴至上主義に陥ると，それは子どもに反映され，学歴で人を判断するようになるだけでなく，親自身をそのような見方で見てしまうような子どもが増えていくのである。

児童中心主義の浸透と親の自信喪失

価値観の変化の中の第3のものとして挙げられるのは，子ども中心主義の浸透である。戦後，アメリカから導入された児童中心主義の教育思想は，子ども数の減少とも重なって，日本の風土の中に，どっかと腰を落ち着けてしまった。これは，家庭生活においては，親の生活は少しぐらい犠牲にしても子どもの願いをかなえてやろうという形であらわれており，日本独自の「甘えの構造」とも重なって過保護を助長する一因にもなっている。児童中心主義のやっかいな点は，子どもの個性や発達過程についての大人の「理解」を強調している点である。「理解」することには極限がないから，親はもっと子どもを理解してやらなければならないのではないかと考えたり，子どもが悪くなるのは自分の理解が足りないからだと悩み，この面でも子どものしつけや教育に対する自信喪失をもたらすことになる。さらにやっかいなことは，戦後の幼児教育や学校教育が児童中心主義を採用したために，幼稚園や学校での教育方法は親にとって「見えない」ものになっており，そのことが，いっそう親の不安や自信喪失を深めているのである。

男女平等思想の浸透

最後に，父権低下と密接に関連するものとして，男女平等思想の浸透を挙げておかなければなるまい。勢力関係にせよ，役割分担にせよ，戦前と戦後を比較すると夫婦関係は著しく変化した。戦後，旧民法は否定され，個人の自由を尊重する家族法が制定された。その結果女性の地位は戦前に比べ著しく向上し，子どもの教育についても，両親が同等の権利で同

等の分担をするのが望ましいという考え方が広く支持されるようになった。特に，若い親の間では父親の役割，母親の役割といった区分が以前ほど明確ではなくなりつつある。このような情況のもとで，父親ひとりが威厳を保ったり，母親と違った影響力を子どもに及ぼすということはよほどのことがないかぎり難しいと言えるのではないだろうか。

(4)　子どもから見た現代の父親

ヴォーゲルがえがいた戦後日本の父親

これまで父親を取り巻く情況の変化を，労働形態，家族構造，価値観などについて述べてきたが，父子関係の現状は，いったいどのようになっているのであろうか。次に引用した一文は，E. F. ヴォーゲルが『日本の新中間階級』という著書の中で，戦後の父子関係について述べた部分である。

「父親と子どもとのつき合い方は，ちょっと信じられないくらいやさしいというのが普通である。父親が子どもにものを言いつけたりすることもほとんどなく，子どもの躾は，もっぱら母親にまかせっきりである。父親は，まるで小さな子どもに帰ったかのように，子ども達と家の中で一緒に遊ぶ。その情景を最も適確に表現するなら，多くの母親たちが言っているように，まるでおもちゃをあずけられた子どものようにである。子ども達には，非常に愛情のこもった振る舞い方をし，2番目の子どもが生まれると，父親は上の子と一緒に寝たり，風呂に入ったりする。父親達自身も子ども達にはつとめて親切にし，できるだけこうすべきだなどとは，口にするまいと心がけているようである。そして母親があまり厳しくしすぎたりするような時には，子ども達に何か物をやったりする。そこで，子ども達もこうした父親の配慮にこたえて，喜んで父親と一緒に散歩に出かけたり，買い物につき合ったりするわけである。」

家父長制家族から民主的家族へ

ヴォーゲルが日本の家庭を調査したのは，社会が民主化され，家族も戦前の家父長制家族から民主的家族へと変わりつつある昭和33年から35年の間の時期である。ここに描かれている父子関係と，先に引用したベネディクトの描いた父子関

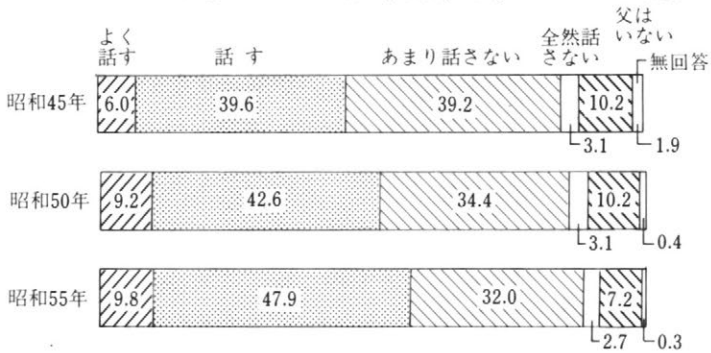
係とを見比べると，大平洋戦争をさかいに，日本の父親のあり方が大きく変わってきたことがよくわかる。ベネディクトが描いた父親像が「厳父」だとすると，ヴォーゲルの父親像は「友達パパ」という言い方ができよう。

「厳父」から「友達パパ」へ

昭和35年から更に20年以上経ったいま，父子関係は更に親密度を増していることが予想される。図⑧は，昭和45年から5年ごとに総理府が行っている『青少年の連帯感などに関する調査』の結果を，時系列的にみてみたものである。過去10年間ほどの間に確実に父親と話し合いをする者の数は増えている。また，子どもの眼に映った父親の姿をみてみても，図⑨のように，「仕事専念型」や「仕事優先型」は減少し，「家庭優先型」が増えていることがわかる。

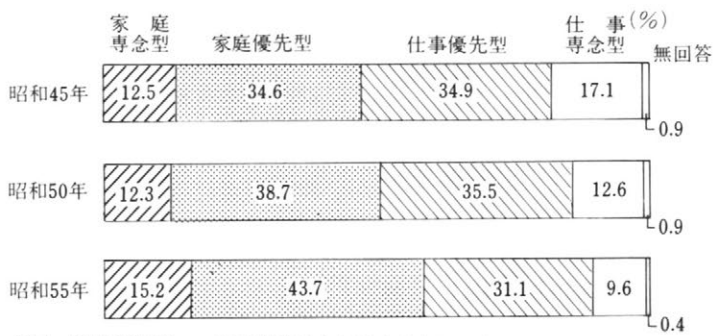
しかし，一方で，表⑩の父と話し合わない理由をたずねた結果をみると，「わかってもらえない」とか，「話すことがな

図⑧　父との話し合い〔時系列比較〕　(%)



図⑧～⑪は総理府青少年対策本部『10年前との比較からみた現代の青少年』(昭和56年)より。

図⑨　家庭・仕事に対する父の態度〔時系列比較〕



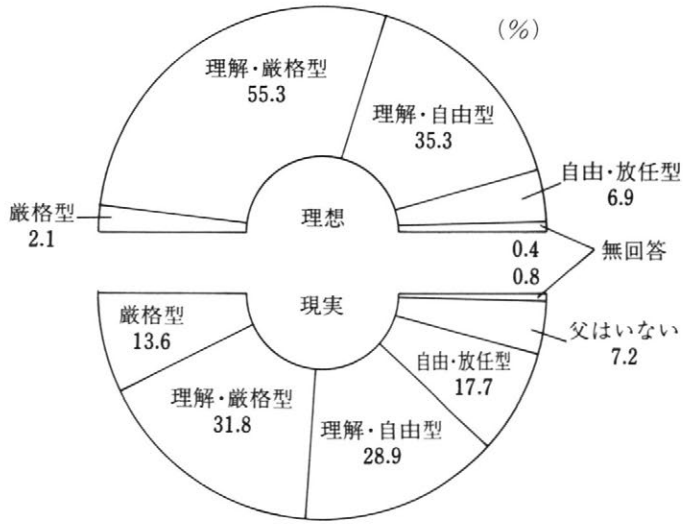
(注)　家庭専念型……家庭(生活)を何よりも大切にする
家庭優先型……どちらかといえば仕事よりも家庭(生活)を大切にする
仕事優先型……どちらかといえば家庭(生活)よりも仕事を大切にする
仕事専念型……仕事を何よりも大切にする

表⑩　父と話し合わない理由〔時系列比較〕

(%)

	わかってもらえない	たよりにならない	すぐおこる	うるさがる	話すことがない	話す機会がない	はずかしい
昭和45年	15.5	6.5	5.9	3.7	49.8	40.8	3.8
昭和50年	11.6	3.8	6.1	3.6	47.8	42.8	3.8
昭和55年	10.7	3.2	6.2	2.4	42.8	45.8	2.4

図⑪　子どもに対する父親の態度(理想と現実)



〔図⑧～⑪，表⑩の資料出所〕総理府青少年対策本部
「青少年の連帯感などに関する調査」
『10年前の比較からみた現代の青少年』(昭和56年度版)

(注)　**厳格型**……何ごとによらず厳しい父親
理解・厳格型……子どもの気持ちを理解した上でも信じるところに従って，厳しくする父親
理解・自由型……子どもの気持ちを理解した上で，厳しくいわずに見守る父親
自由・放任型……何ごとによらず自由にさせる父親

い」という理由を挙げる者は減少しているのに対し，「話す機会がない」と答えた者は，逆に増加している。また，子どもからみた理想の父の態度と現実の父の態度を比べてみると，図⑪のように「厳格型」や「自由・放任型」の父親を理想とする者は極めて少ないにもかかわらず，現実にはこのタイプ

〔表⑫の資料出所〕
『世界の青年との比較からみた日本の青年——世界青年意識調査（第2回）結果報告書』昭和53年より

表⑫

Q8 あなたのお父さんについて、次の事柄にお答えください。（それぞれ一つずつ）	一、子どものしつけや教育などに関して、自信のある態度をとっていますか。			二、子どもに社会生活について指導していますか。			三、家庭内の重要な問題について主導権を握っていますか。			四、家庭の者と家庭内の事柄について話し合う時間を作っていますか。		
	a はい	b いいえ	c NA	a はい	b いいえ	c NA	a はい	b いいえ	c NA	a はい	b いいえ	c NA
日本	58.2 (%)	25.1	16.7	55.6	31.4	13.0	81.0	11.1	7.9	52.7	35.4	11.9
アメリカ	85.0	12.6	2.4	56.8	39.4	3.8	76.2	20.4	3.4	67.9	29.3	2.8
イギリス	77.0	15.9	7.1	69.9	25.5	4.5	65.7	26.4	8.0	64.4	28.9	6.7
西ドイツ	59.4	28.3	12.2	47.4	37.8	14.9	64.9	21.1	14.0	64.9	23.2	11.9
フランス	69.7	18.8	11.5	51.2	37.9	10.8	52.1	34.7	13.2	63.7	28.4	7.9
スイス	75.9	18.1	6.0	70.3	24.1	5.6	64.1	27.2	8.7	70.2	23.8	6.0
スウェーデン	45.6	43.2	11.2	18.7	66.0	15.3	36.7	47.9	15.4	67.7	20.1	12.2
オーストラリア	72.3	22.9	4.8	44.6	49.3	6.1	64.7	29.0	6.3	66.6	29.5	3.8
インド	84.1	13.0	2.9	79.0	17.4	3.7	87.5	9.4	3.1	80.2	16.0	3.8
フィリピン	95.7	3.4	0.9	94.4	5.1	0.4	94.8	4.0	1.2	93.5	5.7	0.8
ブラジル	84.1	13.9	2.0	63.3	33.7	3.0	77.7	18.2	4.1	73.1	23.7	3.3
(回答数)	1,822	1,837	1,786	1,723	1,780	1,804	1,867	1,819	1,749	1,679	1,674	

出典：総理府青少年対策本部『世界の青年との比較からみた日本の青年——世界青年意識調査(第2回)報告書』昭和53年，144～145頁。

の父親がそれぞれ13.6%，17.7%いることがわかる。

父と子の間の親密度は深まった

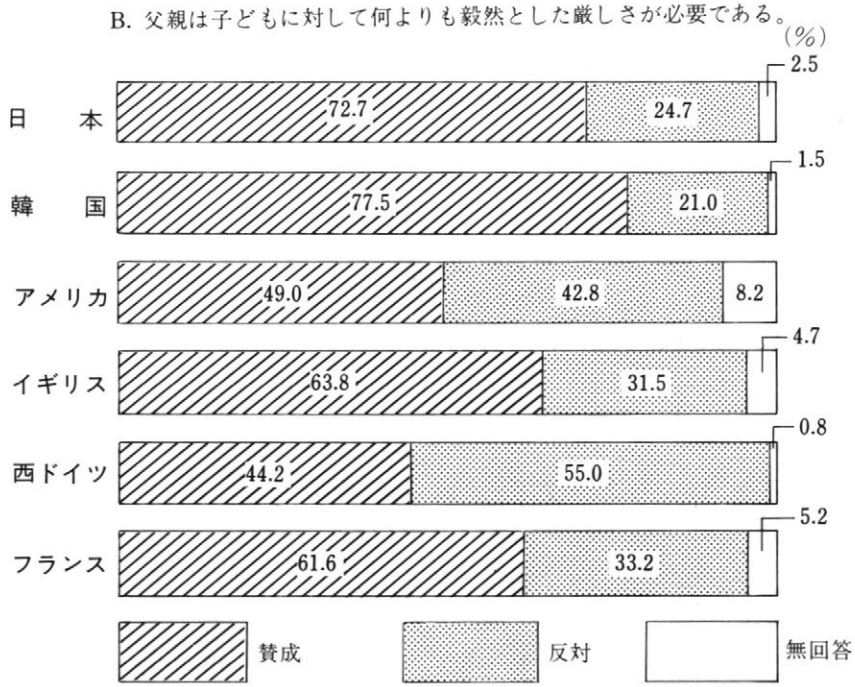
これらの結果から判断すると，たしかに戦後30数年の間に父と子の関係は親密度を増し，戦前とは違った父子関係がつくられつつあることがわかるのであるが，その反面，時間的余裕がないために子どもとの接触が少ない父親が増えていることも事実である。また，全体としては，子どもに理解を示す父親が多い中で子どもに対して理解を示さず，自分の考えを一方的に押しつけたり，逆に放任したりする親がいることも事実である。しかし，全体的にみると，日本の父親は，かつての「厳父型」から「友達型」へと大きく変わりつつあると言ってよいだろう。

日本の父親は欧米型の父親にどの程度近づいたか

戦後の家族の民主化は，欧米的な家族関係をモデルにしてすすめられてきたが，果たして日本の父親はどの程度，欧米の父親に近づいたと言えるのだろうか。表⑫は総理府が行った『世界青年意識調査（第2回）』のなかの「父親の役割とそ

図⑬　しつけの方針

B. 父親は子どもに対して何よりも毅然とした厳しさが必要である。



〔出典〕：総理府青少年対策本部『青少年と家庭』 昭和57年5月，48頁

の遂行度」に関する結果である。これをみると，日本の父親は欧米に比べ，家庭内での主導権を握っている者は多いが，家族の者と話し合う時間を作っている者は少なく，また，子どものしつけや教育に関しても自信のある態度をとる者が少ないことがわかる。これだけの結果から，日本の父親は欧米の父親に比べ家庭でその役割を十分果たしていないと断定することはできないのであるが，しつけや教育に対する自信が欧米の父親に比べかなり低いことにもあらわれているように，子どもに対してやさしくなった反面，父親として示すべきなんらかの要素が日本の父親には欠けているのではないだろうか。図⑬は，父親が子どもに対し毅然としたきびしい態度をとるべきかどうかを6か国の親に対してたずねた結果を示したものであるが，韓国についで日本はそれに賛成する者が多いことがわかる。増加しつつある「友達型」父親に対してきわめてきびしい評価が下されていると言うことができよう。

父親に求められる毅然とした態度

II　父親の役割に関する理論

厳父復活のむつかしさ

Ⅰでは主として戦前から父親像の変遷をたどってきたわけであるが，これまで述べてきたことからもわかるように，父親の権威や教育力の低下は，父親個人にのみその原因があるわけではない。その意味では，父親に対して厳しさが求められているとは言え，単にかつての「厳父」復活を唱えるだけでは問題の解決にはならないであろう。我々は，父親とはいったいどのような存在であるのか，子どもの発達に対してどのような役割を果たすのかを，原点にもどってもう一度考えてみる必要があるのではないだろうか。

以下では，父親に関する代表的な理論をいくつか取り上げ，父親の役割についてさらに理解を深めていこうと思う。

母親の教育力の重視

母親がいない場合と父親がいない場合とでは，子どもにとってどちらがより大きな影響があるかという問いを向けられた時，おそらく大半の人は，母親の方が子どもの成長や発達に大きな影響を及ぼすにちがいないと答えるだろう。乳幼児期に母親の養育を受けられなかった子どもに，なんらかの精神的・身体的影響があらわれることは，過去の研究でも明らかにされているし，我々の日常生活の中でもそれを実感として感じることができる。

父親研究の立ちおくれ

それに対して，父親が子どもの発達にどのような役割を果たしているのかということには，これまで人々の目があまり向けられなかった。研究面でも，父親研究は母親研究に比べ大きく立ちおくれていたと言えよう。しかし，「父親なき社会」ということばがしばしば使われるように，父親に関する書物や論文が数多く著されるようになって，ようやく人々の目が父親問題に向けられるようになってきた。

それでは，このような父親問題に対する関心の高まりは，父親の教育力を向上させるものとなっているであろうか。必ずしもそう言えないのが現状である。むしろ，いっそう混乱した状態をもたらしたと言った方がよいだろう。その最大の原因は，ひとことで言えば，戦後の社会の変化のなかで，伝

統的な父親像が急激に崩れ，そこに多様でかつ相矛盾するような父親論が無数に登場してきたことにある。父親のあり方が大きく問われ，新たな社会への父親の適応のしかたが模索されつつあることは確かである。

このような父親像の大きな転換期をむかえている時に，単なる懐古趣味や経験論をこえた，体系としての父親理論を整理し，それぞれの理論のなかで父親の役割がどのように説明されているかを理解しておくことは，今後の父親のあり方を見定めるうえで大切なことであろう。

(1) 家計維持者としての父親

ポストマンの仮説

動物学者のポストマンは，哺乳類の新生児には次の2つの種類があると述べている。1つは，ネズミやイタチのようにたいへん未熟な状態で生まれ，親がつきっきりで世話をしなければならないタイプであり，もう1つは，ウマやウシのように生まれたときすでにかなり成熟した状態にあるタイプである。この2つのタイプは，巣の中で親の養育を受けなければならないかどうかという点で，前者を「就巣性」をもつ哺乳類，後者を「離巣性」をもつ哺乳類と呼ぶ。一般的に，ネズミやイタチなどのような下等なものほど就巣性の傾向が強く，ウシやウマなどの高等なものほど離巣性の傾向が強いと言われている。

ところで，人間の場合はどうだろうか。人間の新生児が，自分で歩くこともものを見ることもできないきわめて無力な存在であることはご存知のとおりである。その状態は，ウシやウマに近いと言うよりむしろネズミやイタチに近いのである。最も高等な動物である人間の新生児がこのように未熟な状態で生まれる理由を，ポストマンは次のように考えた。

生理的早産と母性的養育

つまり，直立歩行を行うことによって，人間には早産の習性が身についてしまい（ポストマンはこれを「生理的早産」と呼んだ），もっと長く母親の胎内にいるべき胎児が，正常な出産よりも1年も早く生まれることになったのだと。そのため，たとえ10か月で生まれたとしても，人間の新生児はすべ

て未熟児の状態にあり，そのために母親の養育が不可欠となるのである。

さらにやっかいなことは，直立歩行することによって，新生児が母親の背にのったりつかまったりしてともに移動することが不可能になった。母親は，移動できない新生児のそばにいてそのめんどうをみなければならなくなったわけである。直立歩行と生理的早産は，母親の行動の自由までうばってしまったのである。したがって，母と子は，他のだれかの助けを借りなければみずからの生命を維持することができなくなった。ここに，母子を保護し，その生活のめんどうをみる1匹のオスが一緒に住むという形態ができあがった。これが家族のはじまりである。(ポストマン,L.著『人間はどこまで動物か』)

母子プラス1匹のオスが家族の原型

最初母子の生命を維持する目的のために形成された母子プラス1匹のオスという集団は，人類の文明を進歩させるうえでも大きく貢献した。文明が進歩するにしたがって人間が学習しなければならないことがらは飛躍的に増大していったが，自分だけの力で生計維持をはかる必要がなくなった母親は，その分のエネルギーを子どもの養育に費やすことができるようになり，子どもに多くの知識や技術を伝達することが可能になったのである。

母親の情緒的安定と父親の役割

父親が家計維持の役割を果たすことによって，母子関係は，経済的な面ばかりでなく情緒的にもかなり安定したものになった。女性の職場進出が増えるにしたがって，家計維持に占める父親の役割の重要性は減少しているかに見えるが，なお多くの家庭での主たる家計維持者は父親であり，父親がその役割を十分に果たしているか否かは，家庭の経済的安定性ばかりでなく情緒的な安定性にも大きな影響を及ぼすと言ってよい。

母子家庭における親子関係

父親による家計維持が行われない極端な場合が母子家庭である。次の表⑭は，母子家庭と一般家庭（非欠損家庭）を比較し，子どもの情緒的安定性を調べた結果であるが，これをみると，母子家庭の子どもは，親子のコミュニケーションや子どもに対する親の配慮・理解といったことがらに関して，

表⑭ 母子家庭と一般家庭の母-子関係

(%)

		男子 良	男子 ふつう	男子 不良	男子 計	女子 良	女子 ふつう	女子 不良	女子 計
A. コミュニケーション	母子家族	25	50	25	100	41	45	14	100
	非欠損の母	36	52	12	100	44	48	8	100
B. 子どもへの配慮	母子家族	16	71	13	100	9	75	16	100
	非欠損の母	23	69	8	100	21	71	8	100
C. 子どもへの信頼	母子家族	25	65	10	100	28	60	12	100
	非欠損の母	27	62	11	100	31	62	7	100
D. 子ども本位	母子家族	40	57	3	100	30	51	19	100
	非欠損の母	35	62	3	100	34	64	2	100
E. 子どもへの理解	母子家族	19	62	19	100	11	79	10	100
	非欠損の母	21	68	11	100	20	71	9	100
F. かわいがりの程度	母子家族	33	58	9	100	26	66	8	100
	非欠損の母	30	66	4	100	32	64	4	100
G. 子どもへの満足	母子家族	10	73	17	100	12	69	19	100
	非欠損の母	11	73	16	100	11	74	15	100
H. 子どもの意見の尊重	母子家族	34	54	12	100	34	60	6	100
	非欠損の母	33	55	12	100	35	56	9	100

姫岡勤他編『現代のしつけと親子関係』(培風館，1974)，203頁より作成

一般家庭の子どもよりも不満が多いことがわかる。

このような結果が生じる原因はいくつか考えることができる。まず1つは，母子家庭では父親にかわって母親が働かざるを得ないために，その分，子どもとの接触が少なくならざるを得ないのである。2つめは，もっと簡単に，父親と母親2人が子どもにかかわっている場合よりも母親1人の場合の方が，量的に子どもとの接触は少なくなると考えられる。しかし，親子関係は単に量的なものだけではない。質的なものがより重要である。これが3つめの原因である。

父親の役割も果さなければならない母子家庭の母親

すなわち，母子家庭では，母親は，母親の役割を果たすと同時に，労働も含めた父親の役割をともに果たさなければならない。子どもにとって母親は，父親でもありかつ母親でもなければならないわけである。この相異なる2つの役割を十分に使いこなせる母親であれば，母子家庭でも子どもの不満

はさほど大きくならないし，発達的にも大きな問題は生じないと言えよう。しかし，これは大変むずかしいことである。表の結果は，このような父親役割，母親役割を使いこなすことがいかにむずかしいかを示すものである。

家族の情緒的安定のために必要な父親

母子家庭の問題を取り上げるまでもなく，家計維持に果たす父親の役割は，経済的な面だけでなく家族全体の情緒的な安定という点でもきわめて重要である。やや長くこの点を述べてきたのは，これが父親が果たす最も基本的な役割と思うからである。

母親中心の教育観の転換

しかし，その反面，これまでの父親論はこの点を強調しすぎたきらいがないでもない。その背景にあったのは，男は外で働き女は家にいて子育てに専念するという考え方である。そこから必然的に，母親の教育力を重視する考え方が生まれてくる。さらに，父親よりも母親の影響の方が重大であるという見方に拍車をかけたのは，幼児期経験重視の発達観である。「三つ子の魂百までも」ということわざにもあらわされているように，人間の基本的な能力やパーソナリティは幼児期にかたちづくられ，その後あまり変化しないという見解が長い間支持されてきた。そして，その幼児期に最も大きな影響を与えるのが母親であることから，母親の教育力が必要以上に強調されてきたのである。

はたして父親は，母子関係を支える単なる脇役にすぎないのだろうか。つづいて，家計維持以外の父親の役割とはいかなるものであるのかを明らかにするために，精神分析と社会学の代表的な父親理論をいくつか紹介してみよう。

(2)　フロイトの父親論

子どもの発達において父親がどのような役割を果たすかを最初に明らかにしたのは，精神分析学者のS.フロイトであろう。彼が父親の役割をどのように考えていたかを簡単に説明しておこう。

幼児性欲とエディプス・コンプレックス

フロイト理論において重要な位置を占めるのは，幼児性欲とエディプス・コンプレックスに関する理論である。

昔から性欲は思春期以降の青年やおとなだけがもっているものであり，子どもは性欲をもたない存在であるとみなされてきた。これに対してフロイトは，性欲は人間行動の原動力であり，乳幼児期からすでに存在していることを明らかにした。かれは性欲に代表されるような快楽を求めるエネルギーを「リビドー」と呼び，リビドーが身体のどの部分にあらわれるかによって，人間の発達段階が次のように区分されると主張した。

人間の発達段階

①**口唇期**——リビドーがくちびるの部分にあらわれる時期

②**肛門期**——リビドーが肛門部分にあらわれる時期

③**男根期**——リビドーが性器部分にあらわれる時期

④**潜伏期**——リビドーが沈殿し，性欲が消滅したように思われる時期

⑤**性器期**——リビドーが再び表面化し，性器部分にあらわれる時期

母子の一体的結合関係

口唇期，肛門期の時期乳児は母親と自分とをはっきり区別することができず，母親との一体的結合関係におかれている。しかし，男根期にはいると(だいたい3才ごろ)，幼児は母親を性愛の対象とみなすようになり，母親を独占したいと思うようになってくる。フロイトによれば，幼い時代にすでに男の子は，自分のものと思いこんでいる母親に対して特殊なやさしい感情を示し始め，その独占をめぐって自分と争う父親を競争者と感じ始めるという。同じように幼い女の子も，父親に対する自分のやさしい愛情をさまたげ，自分にだってりっぱに果たせると思っている地位を占有している母親に対して敵対意識を感じるようになる。このような同性の親に対する幼児の対抗意識のことを，フロイトは「エディプス・コンプレックス」と呼んだ。このエディプ・スコンプレックスは，男根期から潜伏期へ移行する段階で強くあらわれてくる。この段階を「エディプス期」と言う。

超自我（道徳意識）の形成

異性の親への性愛，同性の親への敵意とならんで，エディプス期の特徴としてあげられるのは，子どものなかに「良心

（超自我）」の萌芽的形態がみられるということである。

母親に性愛を示しはじめた子ども（男の子）は，父親にとってかわりたい，父親のようになりたいという強い願望を持つようになるが，一方で，このような願望をもつことによって父親から罰せられるのではないかという罪の意識を感じはじめる。子どもが性器に関心を向けるようになると，母親は，「そんなことをしていたらお父さんにおチンチンを引っこ抜かれますよ」というおどし文句をしばしば用いるが，子どもは，父親がつねに自分を監視し罰しようとしているのではないかという不安を持つようになるのである。フロイトによれば，幼児がこの不安やおそれから解放されるのは，彼が自己を父親と同一化するようになってからである。

「同一化」という行動も大変重要な行動であるので，少し説明を加えておこう。

同一化

同一化とは，他者の精神的な態度や行動をあたかも自分のものであるかのように感じ，それに合うように自己の行動を規制していくことである。たとえば，いつも寝ころんでテレビを見てはいけないと注意されてた幼児が，横になってテレビを見ている母親に向かって，「ちゃんとすわってテレビを見なさい」と注意したとしよう。この時，幼児は，母親が持っていたテレビ視聴についての一種の規範と同一化したと言えるのである。このような同一化が積み重なって，子どもの中におとな（主として親）が持っている道徳観がしだいに内面化されていくのである。

父親の規範への同一化をとおして行われる道徳意識の形成

さて，幼児は父親の眼をおそれ罰をおそれているが，しだいに，自分を罰する存在である父親の規範を取り入れ，自己の欲求を律するようになる。この父親の規範への同一化は無意識のうちに行われるのであるが，それが果たされることによって幼児の性欲はおさえられ，潜伏期といわれる性欲が一見消え失せてしまったかのような時期がおとずれるのである。

エディプス期の以上のような過程を，エリクソンは次のように説明している。

「今や子どもは見つかったときに恥ずかしがるだけでな

く，見つけられはしないかというおそれを抱くようになる。いまや，神の姿を見ることなしに神の声を聞くようになる。さらに子どもは，誰も監視していないような単なる考えや行為についてさえ，自動的に罪を感じはじめる。そしてこれこそ個人的な意味での道徳性の礎石となるものである。」

エディプス期の重要性

フロイト理論の特徴は，このように，人間の発達におけるエディプス期の持つ意味を明らかにした点であると言うことができる。エディプス期において，異性の親に対する子どもの性愛は否定され近親相姦の危機が回避されるだけでなく，子どもは父親の良心を内面化し，のちの発達を左右する道徳性の基礎をきずくのである。この過程は，別の見方をすれば，母親との間でかたちづくられていた愛情関係とは異質な関係があることを子どもが気づく過程であり，自己の行動を規制する外的な権威の存在をはじめて実感する過程でもある。

(3) パーソンズの父親論

父親役割に関する社会学理論

社会学者であるT.パーソンズは，フロイトの理論を社会学的な観点から再構成し，その父親論をさらに発展させた。彼の理論は，フロイト理論を大すじにおいて受け入れたものであるが，いくつかの点で重要な補足修正を行っている。そのなかでも特に重要なのは，父親役割を2つの成分に分けたこと，さらに，性役割の発達と父親との関係を明らかにしたことである。

まず，父親役割の区別についてのパーソンズの説明を紹介しよう。

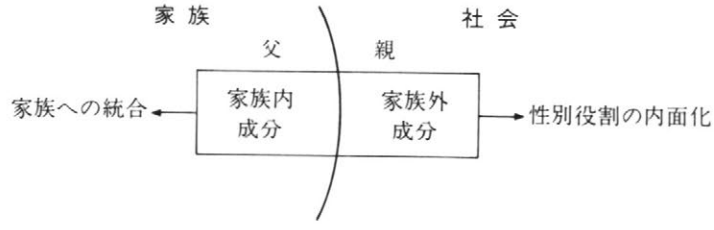
父親役割の2つの成分

パーソンズは，父親の役割は次の2つの成分に分けられると主張した。

① 家族内成分——幼児の初期の母親依存を打破し，全体としての家族に貢献するように動機づける役割

② 家族外成分——男児にとっては，社会における性別役割の担当と関連するところの役割モデルとなり，女児にとっては，男性の理想を示す役割

フロイトは主として，家族の中での父親の役割に注目して彼の理論をつくり上げたが，それに対して，パーソンズは，家族と社会との関係という点に注目して理論化を行った。この点がパーソンズ理論の最大の特徴と言えよう。父親役割に関する2つの成分を簡単に図式化すれば，次のようになろう。



フロイト理論の欠点

フロイトはこの2つの成分を混同していたために，彼の理論にはいくつかの欠点があった。たとえば，エディプス期以後の子どもの父親への同一化は，それ以前の段階でみられるような対象（主として母親）への同一化へと逆もどりする現象であるとみなしたことや，エディプス・コンプレックスの解消や超自我の形成は女の子の場合不完全にしかなされないと述べている点などである。

エディプス期の2つの段階

フロイト理論のこれらの難点を克服すべく，パーソンズは父親役割の成分を2つに分けるとともに，それに対応してエディプス期を次の2つの段階に区別した。

① 子どもを今まで以上に一定レベルの責任をもって家族生活に連座するようにしむけ，また，エロティシズムをめぐって，母子関係に対する夫婦関係の優位を示し，それへの子どもの譲歩を強いる段階

② 子どもを性別にカテゴリー化し，彼らが自己の性別にふさわしい行動の全体的パターンを採用するように動機づける段階

母親中心的な連帯から家族中心的な連帯へ

この2つの段階は，男女の性別カテゴリーがどの程度重視されるかによって分けられる。フロイトはエディプス期のあり方が男の子と女の子とでは違っているという前提で理論化

をはかったが，パーソンズは，前半の段階，つまり子どもが母親中心的な連帯から家族中心的な連帯へと移行する段階においては，性別はさほど重要ではないと考える。それが問題となってくるのは，後半の段階である。

家族への統合の段階

さて，まず，エディプス期の前半の段階においては，異性の親に向けられた幼児の性欲は抑圧され，成長したのちに家族の外に異性の対象をみつけ出すための準備が行われる。フロイトはこの幼児性欲の抑圧がただちに性役割の内面化をもたらすと考えたが，パーソンズは，その中間に「家族への統合」という段階を設定した。この点がパーソンズ理論のすぐれた点である。

つまり，父親を媒介として行われる幼児性欲の抑圧は，幼児の関心を母親からそらし，家族の外へと向けるのではなく，むしろ，家族そのものへと幼児の愛着を方向づけしなおすはたらきをするのである。

母子密着関係からの子どもの解放

成長するにしたがって子どもにはますます多くの責任や自主性が要求されてくるし，高度な内容の学習が必要になってくる。ところが母親への愛着や依存が強すぎる場合には，各発達段階ごとに設定されている課題を達成することができなくなってくる。そこで，母親との密着した状態から子どもをひきはなし，家族そのものへとその愛着の対象を変えさせることが必要になってくる。なぜなら，子どもは家族のなかでさまざまな行動規範や価値パターンを内面化していくのであり，家族の統合度が高ければ高いほどそれは効果的になされるからである。しかも，子どもが内面化しなければならぬ文化内容は，もちろん男らしさや女らしさ，あるいは男性役割や女性役割といったように性別に規定されたものも多いが，それ以上に男女の別をこえ人間として共通に身につけなければならぬものを多く含んでいる。その意味では，母親中心的な連帯から家族中心的な連帯への移行は，男の子にとっても女の子にとってもともに重要なものだと言えよう。

母子密着から，父親を中心とする家族の一員に

以上のように，エディプス期前半の父親の役割は，子どもを母親からひきはなし，家族の中へと統合することにある。

子どもの側からみれば，それは，母親との二者関係から父親をリーダーとする大きな集団参加へと移行することである。

これにつづくエディプス期後半以後の段階は，父親役割の家族外成分，つまり男性役割モデルとしての父親が大きな意味をもってくる段階である。

家族内の役割分化

パーソンズは，家族には社会の役割分化を反映した図⑮のような「量的分化」と「質的分化」があると述べている。量的分化とは，威信や権威の分化であり，これは年令にもとづいて行われる。父親や母親が息子や娘よりも大きな力を持っているということを，この量的分化の軸はあらわしている。それに対して，質的分化の軸はもっとくわしい説明を要するだろう。

家族役割の質的分化の考え方をパーソンズは，小集団にお

図⑮　家族の基礎的役割構造

	道具的優先性	表出的優先性
力 優位	道具的優位 父（夫）	表出的優位 母（妻）
力 劣位	道具的劣位 息子（兄弟）	表出的劣位 娘（姉妹）

けるリーダーシップ研究から取り入れたと言われている。10人ぐらいの小さな集団を観察すると，そこに2つの異なったリーダーが存在することがわかる。1つは，仕事や課題を遂行する上で各メンバーにそれぞれの役割を割りあて集団を引っぱっていくリーダーであり（これを「道具的リーダー」と呼ぶ），もう1つは，メンバーの不平や不満を和らげ，仲間意識を育て集団としてのまとまりを保っていくリーダー（これを「表出的リーダー」と呼ぶ）である。この2つのリーダーがたがいに助け合いはげまし合うとき，集団の生産性や統合性は最も高くなる。

道具的リーダーと表出的リーダー

家族を1つの小集団とみたとき当然その中に道具的リーダーと表出的リーダーが分化してくるはずである。社会におけ

る集団の構造が家族に反映されたとみるか，あるいは社会集団が家族の役割構造を擬してその内部構造を分化していったと見るべきかはこの際問題ではない。重要なのは，社会集団と家族との間に役割分化に関しておどろくほどの類似性がみられるということである。このような対応関係があるからこそ，家族の中でよくしつけられた子どもは，社会への適応をうまく果たすことができるのである。

道具的リーダーとしての父親

ところで，父親は家族内での道具的リーダーの役割を果たすのであるが，そのことは子どもに性役割モデルを示していることになる。子どもは，父親と母親との役割分化を通じて男性役割・女性役割を学習するのである。しかし，父親によって示される役割モデルの特徴は，それが「家族外成分」を含んでいるというところにある。つまり，父親は職業を通して外の世界とつながっており，家族と社会とをつなぐ結接点の役割を果たす。それゆえに父親が示す役割モデルは，社会における男性を代表するものであり，父親とのふれあいのなかで子どもたちは社会を感じとり学んでいくのである。パーソンズは，このことを，次のように述べている。

性役割モデルとしての父親

父親役割のなかの家族外価値の重要性

「しかしながらどんな社会の子どもも，家族をこえて広範に拡がっている文化的パターン・システムの初歩を，家族の中で他の家族成員とくに両親との相互作用を通じて学習しなければならない。それゆえ，子どもにとって重要な焦点となるのはまさに父親である。といっても単なる父親としての父親，つまり父親という家族内での役割を果たしているにすぎない男としての父親が重要なのではない。重要なのは，家族外での役割に対して，および家族外の問題をめぐって堅持している一定の文化的価値に対して特殊な関係を結んでいる男としての父親なのである。」

父親の仕事ぶりが与える影響

そしてパーソンズは，このような家族外の価値を体現している父親の役割モデルが子どもに影響を与える際に，父親の職業が大きな意味をもつと考える。子どもたちは，社会において一定の役割を果たしている父親をみるとき，具体的にはその仕事ぶりを通してみていると言うことができる。子ども

の目にうつるのは時には収入や地位であったり，またある時には父親自身の仕事に対する態度であったりするが，父親の仕事ぶりを観察することを通じて子どもは社会の様子を知っていくのである。このような子どもの側からの評価だけでなく，父親からの子どもへの働きかけの際にも職業が大きく作用する。人間は１つの職業に従事することによって，他とは区別される一種の人間関係のパターンを身につけていくが，父と子の交流のなかにも同じような行動パターンが見出されることが多い。このことによって，たとえ父親の仕事する場面を見ていなくとも，子どもは社会において人とつきあう方法というものをそれぞれ独自なかたちで身につけていくのである。

III　子どもの発達と父親

フロイトやパーソンズらの父親論の紹介を通じて，父親は単に家計維持者としてだけでなく，より広範でかつ決定的な影響を子どもに与える存在であることが理解していただけたことと思う。IIで述べたことを簡単に整理すると次のようになる。

フロイトやパーソンズの父親論の要約

① 父親は，家計維持者として家族全体の経済的ならびに情緒的安定に大きな役割を果たす。

② 父親は，幼児期における母親との二者関係から子どもを引き離し，家族中心的な連帯へと移行させる。このことにより，近親相姦の危機を回避するとともに，子どもの社会的文化的学習を促す。

③ 家族の中での道具的リーダーとして子どもたちに性役割モデルを提供する。

④ 職業に従事することを通じて家族と社会とをつなぐ役割を果たし，社会的な価値のパターンを子どもに伝達する。

⑤ ②の役割と関連して，子どもに道徳意識をうえつけ，権威の存在を認識させるということも，父親役割の重要な一側面である。

父親に関する理論的研究と実証的研究

しかし，フロイトやパーソンズの理論はあくまで1つの仮説にとどまるものである。彼らは自分が述べたことを実験や調査で確かめたわけではないので，彼らの理論は誤りを含んでいたり，父親の役割を過大視しているかもしれない。以下で紹介するのは，主としてアメリカで行われた父親役割に関する実証的研究の成果である。理論として提出されたことが実証的にすべて確かめられるとは限らないから，こちらの方がフロイトやパーソンズより正しいと言うことはできないが，彼らとは違ったアプローチによって，子どもの発達と父親との関係に別の角度から光をあてたものとして興味深い内容を数多く含んでいる。

このような実証的研究は最近いくつか紹介されているが，それらが共通して取り扱っているテーマは，①子どもの性役

割発達，②道徳性の発達，③知的発達と父親との関係である。以下，これらのことがらについて主要な研究を紹介していくことにしよう。

(1)　性役割発達と父親

父親の男らしさ

フロイトが指摘したように，子どもは，父親への同一化をとおして性役割を獲得していく。それでは，父親が男らしければ男らしいほど子どもは男らしさを身につけていくのであろうか。これを支持する研究として，まずブロンフェンブレンナーの研究を紹介してみよう。

男らしさに欠ける青年

彼は，男らしさにあまり関心を持たない青年期の男子に焦点をあてその原因をさぐった。そして，そのような男の子達には，伝統的に女性の役割となっている仕事を父親が行っている家庭で育った者が多いと報告している。このような男の子の父親は，料理や家庭の雑用等の仕事を母親にかわって行っており，一般に家庭での意思決定や子どものしつけなどにあまり発言権を持たない者が多かったのである。

青年期の精神病理と弱い父親

これとはやや異なるが，日本でも似たような報告がなされている。それは，登校拒否や長期留年などの青年期病理を扱っている精神科医によってなされたものである。留年学生の治療を行ってきた細木照敏はその病理を次のように述べている。

「このように，自己のアイデンティティを形成するのに最も大切な両親との対象関係の希薄，父母の役割の転倒などの家族力動の歪みの存在は，多くの留年学生にみられ，彼らの精神病理の根源と思われた。戦後の日本の父親，母親のあり方の歪みを標語的に表現する，『父親不在』『教育ママ』『ママゴン』などの言葉はそのままこれら留年学生の両親の姿を示している。本来父親は子どもに対し，その時代の社会的価値を示し伝達する役割を果たすのであるが，これらの父親はその機能を十分果たしえない弱い父親である。」（巻末，参考文献(13)より）

またビラーも，幼稚園の男の子が示す男らしさとその子が

父親を家族の意思決定者として見ている程度との間に強い関係があると述べている。つまり，父親が家庭内のことがらについて主導権をにぎり，意思決定を行っている場合には，その子どもは強烈な男性的行動をとるのである。

子どもの男らしさと関係のない父親の男らしさ

このように，フロイトの同一化理論を支持するような研究もいくつか見られるが，性役割発達に関する実証的研究の多くは，父親の男らしさと息子の男らしさとの間には特に強い関係がないことを証明している。リンは，父親は母親よりも男の子と女の子を区別する傾向があり，男らしさや女らしさをしつけの際に強調しがちであると述べているが，このような父親の努力は，女の子を女らしくする方向には有効に作用しているが，男の子を男らしくすることにはあまり関係がないと報告している。

シンボルとしての父親

このことは，次のように解釈すべきだろう。つまり，子どもは父親に同一化するのだが，父親の行動をすべてまね，父親とまったく同じ人間になるわけではなく，父親の行動にあらわれている男性性を学んでいくのである。パーソンズが父親は子どもにとって1つの「シンボル」であると言った意味はここにある。

問題解決過程としての男性役割の取得

「性の分化は，男の子には問題解決の過程であるが，女の子にとっては課題学習過程である」というリンのことばもこの点を示唆していると言えよう。女の子は母親や身近な女性モデルに自分を近づけることによって女らしさを獲得することができるが，男の子は，父親が示す男性役割を単に取り入れるだけでなく，その背後にあるより広範な意味を学ばなければならないのである。その意味では，父親があまりにも男らしさを強調し，それを子どもに押しつける場合には，逆に子どもの男らしさはそこなわれてしまう。

父親の示すゆとりとやさしさ

男の子が男らしさを獲得するためには，父子関係にある程度のゆとりとやさしさが必要なのである。ビラーが述べているように，「父親が男らしく，そのうえに優しい心遣いをしている場合には，男らしさの発達は促進されている」と言うことができる。このように見てくると，父親が望ましい男性役割モデルとなるということは，必ずしも子どもに対して厳し

くするということを意味しない。アメリカの研究ではむしろやさしく子どもの面倒みのよい父親の方が，子どもの男らしさを促進するという結果が得られているのである。

父親が家庭において示す行動こそが重要である

さらに，ビラーは，外でいかに男性的にふるまっても家庭でそれを示しえないならばなんの意味もないと指摘している。ビラーの次の指摘は，日本の父親にとっても耳のいたいところではないだろうか。

「決定的と言えるほどに重要な要因は，家族交流での父親の性役割の取り入れであり，男らしい行動を家庭外で発揮してもそれは全く無意味である。多くの父親は男らしいことに興味を持ち，仲間や仕事においても男性的に振る舞うが，妻や子どもとの交流では非常に無力である。よく働く父親が家庭でとる主な行動は，ソファーに寝そべってテレビを見たり，居眠りをしたりしていることであると言われているが，型にはまったこのような男性的態度は多くの父親に対してあまりにも的を射た表現である。もし父親があまり家庭の仕事をしない場合には、適度に自己主張し，活動的で，適合力があることを息子に理解させるのはかなり困難である。」（巻末，参考文献(4)より）

性役割学習に関する研究の要点

これまで述べてきたことの要点を述べると，まず第1に，父親の男らしさはそのまま子どもに反映されるわけではないということである。第2に，子どもは父親の特別な活動をみて性役割を獲得していくのではなく，その活動全体から社会で認められていく男性性を確認していくのである。第3に，そのような性役割の学習は，厳格な父子関係よりも，やさしく愛情にあふれた父子関係の方が効果があるということである。第4に，父親が無関心であるよりも子どもの教育に関心を持ち，家庭内で一定の役割を果たす場合に，子どもの性役割学習はスムーズに行われるということである。

父親への同一化と仲間集団への適応

それでは，このような性役割の発達は，他の側面とどのように関連しているのだろうか。この点について，ここでは，子どもの仲間への適応の問題とおとなになってからの適応の問題を取り上げ，簡単に説明しておこう。

たがいに衝突し合う父親の影響と友だちの影響

父親の影響と友だちの影響との関係について、ベンソンは次のように述べている。「男性の模範としての父親の役割は，仲間集団によって減殺される。男の子にとって，父親と男性仲間は，むしろ相互独立的に，またしばしば反対の目的のために作用するのである。」このように，家庭における父親の影響と友だちの影響はたがいに衝突し合い，とくに青年期には友だちの影響力の方が父親の影響力よりも大きくなると言われてきた。それでは，父親への同一化は，子どもの仲間への適応を阻害することになるのであろうか。実証的な研究の結果はむしろ逆である。たとえば，グレイは，仲間による受け入れが高いと評価された男の子は，適切な性の分化行動において高いレベルを示したことを指摘しているし，ペインとマッセンも，父親と強く同一化した男の子はそうでない男の子に比べ，仲間との相互関係において穏やかで友好的であると報告している。ただし，このことは男の子にだけあてはまり，女の子の場合はあまり関係がない。

たしかに父親は子どもが友だちから影響を受けたり，友だちに強く同一化することをきらう傾向がある。しかし，このことと息子が仲間関係をうまくやっていけるかどうかとは別の次元の問題であるようだ。つまり，父親と友だちによって行われる社会化が価値的に相互排除し合うとしても，父親から学んだ男らしさは子どもの仲間への適応を促すように作用するのである。さらに言えば，望むと望まざるにかかわらず，父親が行う性役割の社会化は，その重要な要素として家族をこえたより広い仲間への適応力を身につけさせることを含んでいるのである。

子ども時代の男らしさとおとなになってからの適応

次に，子どもの頃に身につけた男らしさ女らしさは，おとなになってからの適応とどのように関係しているのかについてみてみよう。マッセンは，青年期に男らしさを備えていた少年と女性的な少年を，彼らが30歳になった時に再調査し，前者が後者よりリーダーシップ・支配性・自信・自己受容などの特性に関して劣っていることを見いだした。この調査結果を引用した後に，リンは次のように述べている。

「伝統的な男らしさは青年期の少年たちから高く評価されるが，成人の世界ではあまり価値を置かれないばかりか，実際には男性に１つのハンディキャップをもたらす可能性がある。非常に男らしい姿は，高校生の間では賞賛され，追従者を作り出すが，成人からはそうした評価を受けない。成人は広範ないろいろな特性に価値を置くのであり，その中には女性的特性も多く含まれているのである。男らしさを培う過程で，少年は成人の世界で評価されているような多くの持続的な特徴，たとえば，読書・音楽・映画などの鑑賞力，感受性，異性への思いやりなどの特徴を発達させることを軽視してしまうのかもしれない。」

（巻末，参考文献(3)より）

父親から豊かな内容を学ぶことの大切さ

このように，子どもが狭く固定的な性役割を身につけることは，その後の発達に悪い影響を及ぼすのである。この意味で，父親の示す性役割モデルは豊かで柔軟なものである方が望ましいし，そのためには，子どもと父親との相互作用は豊かでかつゆとりを持ったものであることが大切なのである。

(2)　道徳性の発達と父親

フロイトやパーソンズは，父親への同一化によって子どもはエディプス・コンプレックスから解放され，それと同時に，親の規範を自分の内にもちこんだものとしての「超自我」，つまり良心が形成されると述べたが，それは実証的にどの程度確かめられているのであろうか。結論を先に述べれば，父親が子どもの道徳性の形成に重要な役割を果たすという点に関して，実証的研究の結果はきわめて否定的であると言ってよい。むしろ，母親の方が子どもの道徳性の発達に大きく貢献するという報告の方が多いのである。

父親への同一化は社会規範への同調をうながす

しかし，父親は道徳性の発達と全く無関係ではない。たとえば，ホフマンの第７学年の生徒についての研究では，自分の行動が親にどのような影響を与えるかということを子どもに考えさせるような父親の接し方や子どもの父親への同一化は，道徳的判断の内面化，つまり良心にしたがって行動するという高度の道徳性を促進することが明らかにされている。

つまり，父親への同一化が社会規範への同調傾向と関連しているわけである。また，寛大さや他人の立場に立ってものを考える態度をもった子どもは，父親との接触もひんぱんで，愛情深い父親をもち，しかも，自分を困難にあえて直面させてくれるような人物として父親をみなしている者が多いという研究結果もみられる。ここでもやはり，愛情に満ち，しかもあまり子どもに厳しすぎない父子関係が有利に作用しているようである。

寛大さや愛他精神

父親が厳しすぎると道徳的判断力は育たない

1つ興味ある実験を紹介しよう。ウォルシュは，6歳から8歳の子どもをおもちゃのいっぱいある部屋に1人にし，決しておもちゃにさわってはいけないと命令して子どもの行動を観察した。この実験で，おもちゃをまったく無視してじっとすわっている子どもは，子どもに対して厳しく子どものやることにいちいち口出しする父親を持っていることが多かった。このように，父親があまり厳しすぎる場合には，子どもの道徳的判断力は育たない可能性がある。

リンは，父親と子どもの道徳性の発達との関係について述べた章の結論として，次のように述べている。

「息子と積極的に接触し，息子も彼に同一化しているような父親の存在は，高い水準の道徳的発達を促す。父親がただ権力のみを行使する場合は，外見的には道徳的行動を促すように見えるが，真の高い水準の道徳的発達にとっては不利な結果となる。」（巻末，参考文献(3)より）

役割モデルとしての父親

このように父親は子どもの道徳性の発達となんらかの関係を持っているわけであるが，ホフマンは，道徳性発達の内容に関しては母親がはるかに大きな影響力を持っていると述べている。そして，父親に関しては，父親が適切な役割モデルを提供しない場合には，子どもの道徳性の発達がおくれることを指摘している。が，父親が「役割モデル」になるということはどういうことなのだろうか。

ここで，フロイトの精神分析理論やパーソンズの社会学理論とならんで，父親の役割について述べるときにしばしば引用される「モデリング」論について簡単に説明しておこう。

モデリング理論

モデリング論以前の学習論は，なんらかの行動がおこる時にはその行動がひきおこされた時に報酬が与えられるからだとみなしてきた。たとえば，子どもが勉強するのはその結果として成績が上がったり，あるいは先生や親にほめられるからだと考えたわけである。しかし，報酬がなくとも，身近にモデルがあり，それをつねに観察しているとモデルと同じような行動を観察者がするようになる。親が勉強する姿を見て子どもが勉強するようになるようにである。そして，人間の行動のなかでモデリングによってひきおこされる行動がきわめて多いことが，バンデュラらの研究によって明らかにされてきたのである。モデリングは，単なる「模倣を越え，モデルの行動と象徴的に等質の行動を取り入れること」と説明されているが，観察者は，単にモデルの行動をまねるだけでなく，その行動やその状況が持っているふんいきをも含めてモデルの行動を再現するのである。父親が道徳性発達の役割モデルになるというのは，このような意味においてである。

有効なモデルとなるための条件

それでは，モデルとしての効力を発揮するためにはどのような条件が必要なのだろうか。最後に，ブロンフェンブレンナーの要約にもとづいて，その7つの条件を列挙してみよう。

(1)　モデルの効力は，彼が高度の能力，地位，機知縦横の才能を持っていると認知される程度によって増減する。

(2)　モデルの持つ誘導力は，そのモデルが前に示した励ましや報酬の程度に応じて増大する。

(3)　子どもによく“伝播する”影響力のあるモデルは，子どもの環境で支持とコントロールを与える中心的人物，すなわち，両親，遊び仲間，彼の毎日の生活で顕著な役割を演じている年上の子ども達である。

(4)　モデルの持つ誘導力は，人が，そのモデルを，自分と同じような者であると知覚する程度に応じて増大する。

(5)　同じような行動をとる複数のモデルは，単一のモデルに比べ，変化をもたらすものとして有効である。

(6)　子どもがすでに属している集団とか，属したいと願っている集団の行動の目立った特徴と，モデルの行動特徴が

同じである時，モデルの持つ影響力は高まる。

(7) 遂行を実際に引き起させるようなモデルの力は，モデルがある行動をした結果得たものを観察することによって影響される。(巻末，参考文献(12)より)

(3) 知的発達と父親

子どもの知的発達と父親との関係については，フロイトやパーソンズはほとんど触れていない。しかし，実証的研究は，子どもの知的能力と思考スタイル，達成意欲，学業成績や学歴，職業選択など，知的発達の多様な領域にわたって研究を積み重ねてきた。

分析的な思考スタイルを育てる父親

まず，知的能力に関して明らかになっていることは，父親の影響は，10歳以下の子どもでは男の子のより女の子の方により大きくあらわれるということである。また，認知のスタイルに関しては，父と子の間の愛情あふれた関係は子どもの分析的な思考スタイルを育てるということが明らかにされている。これはウィトキンらの研究によるものであるが，彼らは，父親が子どもの養育に積極的に参加し，子どもに愛情をかけてやると，子どもには分析的にものごとを考えたり，柔軟に思考する能力が身につくと報告している。しかも，このつながりは，女の子よりも男の子に顕著にあらわれるようである。

意欲や成績と父親

一般的な知的能力や思考スタイルよりも，達成意欲や学業成績と父親との関係はもっと明白である。

マクレランドらの達成意欲に関する研究によれば，幼少期の子どもに親が自分で問題を解決させる訓練をすることやすぐれた規準を設定してやることは，いずれも，成人期における高度な達成意欲を生み出す必須の条件となる。このような達成意欲は自主性と深い関係があるが，ローゼンらは，男の子にいくつかの課題を与え，親がそれをどう助けるかを観察した。それによると，達成意欲の高い男の子の親は，父母ともに，できるだけ子どもにひとりでやらせようとした。とくに，父親にその傾向が顕著であった。父親は，息子にやり方

を教えてやるよりも，むしろヒントを与えることによって息子の自信を高めようとした。一方，母親は，このような自主性の訓練にあまり関心を示さず，むしろうまくできることを強調する傾向がみられた。

子どもの学習への父親の参加

これと関連して，もう1つボエジャーが小学5，6年生に対して行った研究をみてみよう。彼は，父親には「子育て」質問紙を送り，子どもには達成テストを実施した。その結果，父親が子どもの勉強に参加しているほど，子どもの成績はすぐれていることを見出したが，算数に関しては逆で，父親の参加が多いほど子どもの成績は悪くなる傾向がみられた。また，質問紙調査に回答しなかった父親の子どもが最も成績が高かったことも報告している。成績の悪い子の親には，宿題をしてやったり，しかったりして，子どもを直接手助けする親が多かったのに対し，成績の良い子の親は，子どもに対して高い期待を持っていたが，子どものやることに直接干渉せず，もっぱら達成の機会や理論的根拠，材料などを与えるというかたちで，間接的にしか関与していないようであった。

ここまで子どもの知的発達と父親との関連について述べたことをまとめると，父親の愛情に満ちた態度は子どもの知的能力や達成意欲，成績などを促進するように作用する。これはとくに女子の場合顕著である（ただ，この点に関しては，アメリカでは父親は男の子よりも女の子の成績により関心を持つと指摘されているので，日本では事情が異なるかもしれない。）逆に，父親が権威主義的であったり，子どもに心理的圧力をかけるような場合は知的発達はそこなわれる。また，子どもの教育に対する父親の関心や関与は，一般的には，子どもの知的発達を促すように作用するが，それは，父親が子どもの自主性を尊重し促す場合にあてはまり，子どものやることに直接手を貸す場合には，逆に知的発達を阻害することになる。

子どもの自主性を尊重することの大切さ

IV 新たな父親像の創造

(1) 制度的権威から人格的権威へ

厳父復活は可能か

Iで述べたように，戦後における父親の権威の失墜は，単に父親個人にその原因が求められるものではなく，父親を取り巻く制度的・非制度的な情況の変化によるところが大きかった。しばしば，「現代の父親はだらしない」とか「昔のように父親は威厳を持て」という叱咤激励が，現代の父親に向けられるのを見かけるが，もしそれがかつてのような「厳父」復活を意味するとしたら，それは現実的な意見とは言えない。かつての「厳父」が保持していた権威とそれを背景として発揮されていた教育力が，当時の社会慣習や法制度，あるいは伝統的価値によって支えられていたことを考えると，そのような「よろい」を脱ぎすててしまった現代の父親の権威はかつてとは違ったものにならざるをえないだろう。

戦前の父親が持っていた権威が，慣習や制度によって守られた「外在的権威」であるとするならば，現代の父親はみずからの実力によってその権威を守らなければならないという意味で，「人格的権威」がいま求められていると言うべきであろう。現代の父親は，たしかに，昔の父親のように家中ににらみをきかすようなすごみはないし，子どもたちから超然としているわけでもない。父子関係はきわめて親密で，昔の母親が果たしていたような機能を父親が果たしている場面がないでもない。しかし，これは父親の堕落ではなく，変動のはげしい社会の中で子どもに適応力を身につけさせる方法として必然的に生じた現象なのである。ベンソンの次のような主張は，このことを明解に表現している。

変動社会における父親の役割

「父親がきわめて因襲的であるならば，その子どもは大人になってから，急速に変動する社会にあって，新たな人生の方向づけに適応することが困難になるだろう。父親のもつ統制としつけの機能が減退するにつれて，その表出的な面が増大してきたのも，たぶんこの理由からであろう。権威主義的でない父性の強さを伴った暖かい父親と子どもと

の関係は，子どもがたえず相談を求めて父親に依存するようになることなく，安定感と自信を見出せるような機会を増大させるのである。」（巻末，参考文献(1)より）

親密な父子関係だけでは十分ではない

それでは，父子の接触の量が増大し，親密度が深まれば，人格的権威は自然と形成されるのであろうか。どうもそうではないようである。いったいどのような条件が備われば，それは達成されるのであろうか。

(2)　母親との協力関係の確立

本論では父親の問題に焦点をあててきたし，「Ⅲ．子どもの発達と父親」においても主として父親の及ぼす影響を取り上げて論じてきたが，父親だけあるいは母親だけの影響よりも，両者の力が合成された時にその影響力は最大になるということをいまさらあらためて述べるまでもないだろう。その意味では，父親の教育力を論じる以前に，父親がいかにして母親と緊密な関係を形成するかといった問題の方がより重要だと言わねばならない。かつてパーソンズは，父親には道具的機能，母親には表出的機能をわりあてたが，現代では両者の役割の区別はそれほど明確ではなくなりつつある。むしろ，父親と母親の役割を完全に分けてしまうことが現実的ではなくなりつつあるし，これに家父長制的な権威主義が加わる時には，子どもの発達にとってマイナスの影響が生じることも考えられる。

父親は母親と同じであってよいか

しかし，父親と母親がまったく同じ存在であってよいのかというとそうではない。女性の社会参加が多くなり，父親の役割と母親の役割の同質化傾向は顕著であるが，父親が家族のなかの主要な働き手であるというパターンは依然として変わっていない。したがって，父親には，母親とは違った「父親として」果たさなければならない役割が存在するのである。この点について，ブロンフェンブレンナーは次のように述べている。

父親と母親の役割分担

「男の子の場合でも女の子の場合でも，最高の指導性と信頼性は，母親中心型の家族からも，父親中心型の家族から

も生じないのである。また，妻と夫が同程度に，同じようなしかたで養育に責任を持っている場合にも，指導的で頼もしい子どもは形成されない。むしろ，両親とも積極的ではあるが，支持する役割としつけの役割を区別して，両親が同じ行動をしないような家庭の子どもが指導性を持ち頼もしく育っていくのである。」（巻末，参考文献(12)より）

このように，父親と母親がその役割の独自性を認識しながら，相手の役割を理解し，たがいに相手の役割遂行を助けあっていくという関係が確立されなければならないのである。

(3) 広い社会を伝達する者としての父親

家族と社会とを橋渡しする存在としての父親

それでは，父親に残された，しかも父親に固有の役割とは何だろうか。それは，父親は家族と社会とを橋渡しする存在であるというパーソンズのことばの中に示されている。子どもに家族の外のより広い世界の存在を知らしめ，そこでの価値を伝達するという役割は，家族関係が民主化された現在でもなおかつ重要性を失っていない。むしろ，子どもを取り巻く環境の変化を考えた時，この役割はいっそう重要なものになりつつあると言うことができる。たとえば，地域社会の問題を取り上げてみよう。かつては家の近くに労働の場があったのに対し，職住分離がすすむにつれて子どもの近くから労働の場が失われていった。また，かつての地域社会は多様な職業階層や年令の人々が居住し，さながら全体社会の縮図のようになっていたのに対し，現代の地域社会は団地に象徴されるように，職業構成や年令構成に画一化がみられる。このような画一的な地域社会は，子どもにとって刺激や魅力に乏しいものになっているのである。地域社会に限らず社会全体が画一化され管理化されてうすっぺらになっていることを考えると，広い社会を体験している父親の果たす役割は大きいものがあると言えよう。

子どもを取り巻く環境の変化

仕事を媒介として発揮される父親の影響力

この点から言えば，父親が自分の仕事のことを子どもに語らなくなったということは，子どもの発達にとって見逃しがたい影響を及ぼしていると言ってよいだろう。なぜなら，父

親は，仕事を媒介とすることによって，最も有効に子どもを広い社会へと誘うことができるからである。労働の場において自分がどのような役割を果たしているのか，そしてそれはどのような意味を持っているのか，さらに，どのようにして人々は協力や競争を行っているのか……といったことを，父親は子どもにもっと語って聞かすべきであろう。

内の世界と外の世界

外の世界の出来事を子どもに伝えるということは，家の中で通用することが外の世界では通用しないということを教えることでもある。内の世界は，愛情や思いやりによって支えられている一種の共同体であるのに対し，外の世界は，甘えやわがままを許さないけじめと規則の世界である。家の内と外とではこのように人間関係のあり方が根本的に違うのであるが，子どもたちはそれをはっきりと自覚していない。父親による適切な社会化を欠いた時，その子ども達は裸のままでこの厳しい世界に投げこまれるのである。父親が彼本来の，家族と社会とのかけ橋としての役割を十分に果たしていないことが，現代の青少年問題をひきおこしている1つの原因であることはまちがいない。

(4)　母子関係の切断と父親としての成長

父性原理と母性原理

外の世界の厳しさを子どもに教えるということは，河合隼雄氏のことばを借りて言えば，すべてを含み込み，すべてを平等なものとみなす「母性原理」の世界から子どもを解き放ち，すべてのものを切断し，人間をその能力や個性に応じて類別する「父性原理」の世界へと子どもを導くということである。

「永遠の少年」型の社会日本

ところで河合氏は，日本人は西欧的な「父性原理」を確立することができず,「母性原理」の支配のもとに「永遠の少年」型の社会を形成してきた，という興味ある指摘を行っている。もしそうだとすれば，父親自らが「母性原理」から解放されていないために，日本の父親は母子の一体的関係をつきやぶり，子どもを社会へと導く役割を果たせないばかりか，悪くすれば第2の母親として，父親自身が子どもを包み込んでし

まう危険性を持っているということになる。たしかに日本社会は全体として甘えの構造を宿しており，西欧的な自我が育ちにくい土壌を持っている。そのような社会において，おとなとしての父親自身が「永遠の少年」としての未熟さを残しているという指摘は的を射たものであると言うことができる。現代の父子関係の軟弱さを非難する声の背景には，このような父親の未熟さに対する認識があるものと思われる。

父親の未熟さ

子どもに対する父親の優越性

それでは，日本の父親には，子どもを教育する資格が欠けているのだろうか。結論は，否である。人はなんらかの資格を持っているから父親になるわけではない。子どもより何十年か先に生まれ，それに生を授けたという事実により父親となるのである。その何十年かの間に積み重ねてきた経験こそが，子どもに対する父親の優越性を裏づけるのである。

母性原理が支配する社会にあっても，家族と社会とは全く連続的なものとしてあるのではなく，両者の間にはなんらかの境界が存在する。いかに未熟であっても，父親は子どもの知らない社会的世界を多く知っており，それゆえ，父親は，家族の誰よりも社会の代弁者として，家族の中に社会的要素——規則とけじめ——を積極的に取り入れようとするのである。そして，このように，社会的要素を家族関係の中にさしはさむことによって，母子関係を子どもの成長にしたがって変化させうるのである。

規則とけじめの代弁者としての父親

「父親である」ことと「父親になる」こと

しかし，最後にわれわれは，父親が，「父親である」ことの上にあぐらをかくのではなく，「父親になる」ための努力が必要なことを強調しておく必要がある。日本社会にも従来とは異なる父性原理にもとづく人間関係が根づき広まろうとしている。高学歴化の結果としての序列意識の形成などがそれである。これがよいことであるかどうかは別として，父性原理はいっそう日本社会の中に浸透していくにちがいないのである。父親は，このような社会の変動に直面して，自らそれに対処する生き方を確立しなければならない。そうでなければ，子どもにとって単に古い価値を押しつける存在に終わり，子どもを社会へと導く役割を十分に果たせなくなってしまうの

である。

新たな父性原理の確立に向けて

現在広くみられる民主的な父子関係は，親密であるだけに，父親が主体性や向上性を示さない場合には，父子ともに未熟なままに留めてしまう危険性を多分に含んでいる。父親は，新たな父性原理の確立に向かって努力する自らの生きざまを示すことによってこそ，子どもの先導者となりうるのであり，その時はじめて，父親の「人格的権威」の確立が可能になるのである。

《参考文献》

(1) L. ベンソン，萩原元昭訳
『父親の社会学』　（共同出版，1973）
(2) 平井信義他編著
『父親の事典』　（ぎょうせい，1977）
(3) D. B. リン，今泉信人他訳
『父親――その役割と子どもの発達』　（北大路書房，1981）
(4) M. E. ラム編著，久米稔他訳
『父親の役割――乳幼児発達とのかかわり』
（家政教育社，1981）
(5) T. パーソンズ他，橋爪貞雄他訳
『核家族と子どもの社会化』（黎明書房，1970）
(6) S. フロイト，懸田克躬訳
『精神分析学入門』（中央公論社，1978）
(7) 河合隼雄
『母性社会日本の病理』（中央公論社，1976）
(8) R. ベネディクト
『菊と刀』
(9) E. ヴォーゲル，佐々木徹郎編訳
『日本の新中間階級』（誠信書房，1968）
(10) 柳田國男
『先祖の話』（筑摩書房，1975）
(11) M. フォーテス，田中真砂子編訳
『祖先崇拝の論理』（ぺりかん社，1980）
(12) U. ブロンフェンブレンナー，長島貞夫訳
『二つの世界の子どもたち』（金子書房，1971）
(13) 笠原嘉他編著
『青年の精神病理』（弘文堂，1976）
(14) A. ミッチャーリッヒ，小見山実訳
『父親なき社会』（新泉社，1972）
(15) 川島武宜
『イデオロギーとしての家族制度』（岩波
書店，1957）